

山田博光

国木田独歩論考

山田博光（やまだ・ひろみつ）

昭和三年、長野県に生まれる。

昭和二年、信州大学文理学部英文科卒業。

昭和三四年、東京都立大学院国文科（博）修了。

現在、帝塚山学院大学教授

主著、『日本近代文学大系10・国木田独歩集』注釈（角川書店・昭45）

『明治の文学』共著（有斐閣・昭47）

『戦後文学』シンポジウム（学生社・昭52）

現住所 大阪府南河内郡狹山町大野台2―3―14

国木田独歩論考

昭和五三年九月五日 初版発行

著者——山田博光

装本——郡幸雄

発行者——細萱尚孝

発行所——株式会社創世記

東京都港区元赤坂一―四―二 赤坂パレスビル

電話東京（〇三）四七八―〇二一

振替東京三一六二二四二

印刷・製本——日本製版株式会社

定価——二八〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

©一九七八年 検印廃止

国木田独歩論考

目次

序にかえて——独歩と私——四

独歩文学の揺籃期——九

独歩と民友社——一〇

独歩文学の位置づけ——二八

独歩の精神革命——四三

独歩と佐々城豊寿——五四

『愛弟通信』とその周囲——七三

国木田独歩の新資料——八四

独歩の作品——一〇三

独歩文学入門——一〇四

独歩と民衆——一二二

短編集『武蔵野』の魅力—— 一一九

「河霧」について—— 一二七

湖処子と独歩—— 婦省小説をめぐって—— 一三七

「牛肉と馬鈴薯」研究ノート—— 一四九

「運命論者」の問題—— 一六六

「悪魔」の思想—— 一八一

「春の鳥」—— 一九七

明治期の知識人の肖像—— 風葉・独歩・漱石の小説から—— 二〇三

独歩と自然主義—— 二二〇

独歩文学の理解者—— 二三七

民友社とその周囲—— 二四一

民友社の人々—— 二四二

二葉亭と松原岩五郎・横山源之助—— 二五三

明治の社会ルポルタージュ—— 二六九

民友社周辺の文学論争—— 二八九

社会小説論—— その源流と展開—— 三二八

あとがき—— 三四一

序にかえて——独歩と私

太平洋戦争末期、中学生であった私は、勤労動員で工場に駆り出された。勉強からの解放感と索漠とした日常からの逃避欲とが相まって、私は以前からの乱読癖を一層つのらせた。父の書架にあった改造社版『現代日本文学全集』を読破したのもそのころである。

そのとき私が興味を持って読んだのは、露伴、鏡花、独歩、蘆花、漱石などの明治文学と、このシリーズでは新興文学の名を冠せられていた横光利一・川端康成らの昭和の新文学であり、自然主義以後大正時代の文学では、わずかに竜之介や潤一郎など非私小説系統の二、三の作家を愛読したのみであった。

すなわち、自然主義・私小説の系統の作家はあまり印象に残らなかった。これは少年の日の感受性としては普通のものである。とりわけ、独歩の少年ものや蘆花の『思出の記』が好きで、中学生仲間に吹聴したところ、文学少年としては先輩格にあたるK君から、まだそんなものを読んでいるのか幼稚だなという底意を秘めた口調で、ヘッセとカロッサをすすめられた記憶がある。

私はK君のすすめに素直に従って、ヘッセとカロッサを愛読したけれども、独歩や蘆花に対する愛着の気持ちは一向にさめなかった。

そのようなある日、私は自宅の土蔵の一隅から一冊の本を発見した。そこには明治初年の薩摩辞書をはじめ、さまざまな書

物が乱雑に積み重ねられていたけれども、私はその中の『独歩遺文』という一冊に吸い寄せられた。これは沼波瓊なみけいおん音編で、明治四四年に日高有倫堂から刊行された、独歩の遺稿集である。そして、多くは青年時代の独歩の思索と煩悶のあとを示す感想文である。私はこれを読んで、ジワジワと心にしみ入るような一種の感銘を受けた。当時ははっきりとは意識しなかったけれども、そのときの感銘を分析すると次のようになる。

それまでの私には、独歩について二つのイメージがあった。一つは、中学校の国語教科書（岩波書店版）に載っていた「武蔵野」の一節から受けた、名文家というイメージである。私は、「雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるとき林影一時に、煌めく」とか、「月を踏で散歩す、青煙地を這ひ月光林に碎く」といった文章を暗唱し、自分もいつかはこのような文章を書きたいと思っていた。

もう一つは、「馬上の友」「非凡なる凡人」「春の鳥」のような、少年を主人公にした小説に心をひかれ、少年の友情と悲しみを描く卓抜な才能を持った作家というイメージである。ところが、『独歩遺文』から受けたイメージは、そのいずれでもなかった。ここには悩み、傷つき、懂れている青年の魂があった。人間の内面生活の重さ、暗さが溢れていた。美文や完成された作品からうかがい知ることのできない、ひとりの人間の精神生活が露呈していた。私はそれにひきつけられたのである。

しかし、当時の私は、小説は美しい物語を作る才能が生み出したものと思っており、孤独な人間の内面で費やされる思索と苦悩の膨大な時間が、作品の誕生とつながりがあるうとは、想像もできなかった。そのつながり、すなわち『独歩遺文』や『欺かざるの記』の苦悩と精神彷徨とが、独歩の作品の誕生と密接に結びついていると感ずるようになったのは、もっと後になってからである。

敗戦後、私ははじめて同時代の文学に触れた。『人間』『展望』『近代文学』『綜合文化』など続々創刊される文芸雑誌に、私は心を奪われた。とりわけ、戦後派と太宰治に関心を寄せ、読みふけた。高校から大学にかけての数年間、戦後派とフラ

ンス文学をはじめとする翻訳小説ばかり読み、ともすれば獨歩の名前も忘れがちであった。

昭和二年の『展望』に、前田重氏が「獨歩の秘密」を発表した。獨歩の出生の秘密をめぐる論争のきっかけとなった、有名な論文である。敬愛する獨歩の名前に引かれて読んだけど、当時埴谷雄高や椎名麟三を愛読し、生の本質は何か、人類と世界の運命は何か、と観念的な主題ばかり追っていた私には、獨歩の眞の父がだれであるかという問題は、どうでもいいように感じられた。

獨歩と再びめぐりあったのは、私が大学院で日本の近代文学を専攻するようになってからである。当時私は、昭和初年代の文芸評論家であり、戦後は北村透谷全集の編集に精根を傾けておられた勝本清一郎先生の指導を受けていた。

そして私は、横から先生の仕事ぶりを拝見し、全集の編集とは、文学の研究とは、このような資料の博搜と文献の徹底した読みとを必要とするものかと、空恐ろしい気がした。しかし、文学の研究を志すものとして、万分の一でも先生の態度を学びたいと思っていた。研究対象は、明治文学評論史と國木田獨歩に、次第に焦点が定まった。勝本先生の方法で、獨歩ないし評論史をやりたいというのが、当時の私の気持ちであった。

戦後文学に対する愛好にもかかわらず、ここで獨歩を取りあげたのは、一つは現存の作家を研究するということに対するテレくささもあったが、このころ何かにつけて少年時代の愛読書であった獨歩の作品のことが思い出されたからである。

たとえば、戦後流行した実存主義思想に触れ、「牛肉と馬鈴薯」「神の子」の驚異心と天地生存感を実存的自覚のことではないか。私がワーズワスの詩集やイエーツの「イニスフリーの島」の詩が好きなのは、そこに獨歩の「山林に自由存す」と同質のものを感じているからではないか。田山花袋「蒲団」型自然主義から私小説の袋小路へと辿った、エゴに執着しすぎて他者を描けない日本的リアリズムではなく、いったんはエゴを否定して他者を描き、その中に自己の再生をはかる本格的リアリズムの道は、獨歩の「忘れえぬ人々」への連帯感や小民への愛がその先驅となっているのではないか。このような思いが、当時

の私の頭を去来していた。

私は手はじめとして、独歩の著作物と文献の博搜に取りかかった。独歩が執筆したと思われるすべての定期刊行物の創刊号から終刊号まで目を通すこと。

幸い私の学んでおった都立大学の図書館は明治の文献が豊富であり、国会図書館や東大の明治新聞雑誌文庫も利用可能であった。予想したとおり手ごたえがあった。『女学雑誌』『文壇』『国民新聞』『国民之友』『婦人新報』などから、逸文が続続出てきた。

とりわけ興味深かったのは、『婦人新報』の場合である。「欺かざるの記」明治三〇年三月五日の「婦人新報に寄稿する所あらんと欲して今、トルストイ伯の『めをと』を読み了りぬ」という文章が、手がかりになった。そのころの『婦人新報』に当たってみると、明治三〇年三月号に「『めをと』を読みて」が載っていた。

筆名は遠山ゆき子。その前後の号をみると、遠山雪子という筆名の文章が毎号のように載っていた。私は、ドキドキする心を静めて、一つ一つ読んでみると、内容からすべて独歩のものであることがわかった。これが、私の独歩研究の第一歩であった。

そのときの独歩研究は、幸いにものちに「国木田独歩の新資料」(『国文学』昭34・1—2)として発表でき、講談社版『日本現代文学全集』18の『国木田独歩集』の年譜・参考文献の作成に利用できた。逸文のすべてが、学習研究社版『国木田独歩全集』第一巻などに収められたのはいうまでもない。

その後の独歩研究は、角川版『日本近代文学大系』の『国木田独歩集』の頭注にぶちこんだつもりである。また、折に触れて独歩についての論も発表しているが、牛の歩みの歎きをもらしている日常である。

独歩文学の摇篮期

独歩と民友社

民友社との交渉

独歩が山口中学校を中退して上京したのは明治二〇年三月のことである。この年二月、徳富蘇峰は民友社を創立し、『国民之友』を創刊し、三月には『新日本之青年』を刊行している。前年の十月には『将来之日本』も刊行している。当時の蘇峰の青年学生間の人気は大変なものであった。日本の未来を担うものとして新時代の青年をあげ、「天保生まれの老人」を否定したからである。独歩もその新しい「学問ノススメ」(『新日本之青年』)によって勇気づけられた一人である。

同年八月、蘇峰が民友社の片腕として熊本から連れて来た人見一太郎は、新時代の青年を結集するため、日本青年協会を組織し、機関誌として『青年思海』を創刊した。賛成員として中江篤介・植木枝盛などと並んで、徳富一敬(蘇峰の父)・徳富猪一郎・竹越与三郎などの名前が並んでいるところから見ても、この協会は民友社の青年部の感がある。独歩は二一年二月、この協会に入会している。前後して後の独歩の親友である大久保余所五郎・水谷真熊・古川豹造らも入会している。翌三月の『青年思海』8号に、独歩は蘇峰の前記の著作の影響のもとに「群書ニ渉レ」を發表している。これは独歩の処女論文である。既存の全集などにこの文が再録されていないので、次にその要旨を掲げよう。

*注1

論壇のいたるところで青年を論じている。将来の日本を左右するものは青年である、青年の任は重いと。しかし、青年はいたずらに悲憤慷慨し、輕躁浮薄であつてはいけない。明治一四、五年頃政治世界に狂氣した青年を見よ。彼らは危険な政治世界の火災に浮かされて、短刀を懷にし、酔つたように地方人民に向かつて自由民権を主張した。しかし、彼らは煽動され、受動的に運動をしたので、目的は不正ではないが社会に一つの利益もあたえず、口に正義を説きながら強盜を行つた。なぜ過去の青年がこのような憐れな境遇に陥つたかという、西洋の思想も知らずにみだりに悲憤慷慨したからである。現今の青年は一時の熱情に駆られて政治世界にとびだし、一定の志操もなく柳の風になびくように煽動者の機械となつてはいけない。現今の青年書生、特に将来政治世界に身をゆだねようとするものは、いたずらに慷慨を事とせず、西洋の群書を涉獵し、実力を養成すべきである。

この文からは、独歩が自由民権運動に対して否定的であることが看取される。透谷がつまづいたのと同じ解休期の民権運動の頽廢に反撥している。しかし両者の違いは、透谷が民権運動の参加者としてその意義を深く内在的に把握しており、したがつてその挫折から深い傷痕をうけ、「楚囚之詩」や「蓬萊曲」に結晶するような鬱屈とした憂愁の哲理を完成しているのに対し、独歩は民権運動を支えていた能動的なエネルギーを理解せず、したがつて自らの魂に傷痕を刻みつけてもいない。そして独歩が主張しているのは、民権運動そのものを再興ないしは發展させることではなく、民権運動を支える魂を西洋の學問や思想によつてつちかえということである。そしてそれこそが、蘇峰をはじめとする民友社の人々の明治二十年代において果たそうとしていた役割だったのである。

『青年思海』のちに『時務評論』と改題し、中村修一と谷口林太郎が編集しているが、明治二三年二月、民友社から『国

『民新聞』が創刊されるや両名とも入社している。この時同時に宮崎湖処子、内田不知庵なども入社し、特に湖処子は明治二十年代の民友社を代表する詩人となる。湖処子は入社後まもなく二三年六月、『帰省』を民友社から刊行して、蘇峰、不知庵をはじめ多くの人々の絶賛をあげ、この書は明治年間を通じて版を重ねている。独歩はこの書を早速読んで感激し、親友の大久保余所五郎にも一冊送っている。独歩はこの書を通じてまず自然や田園への眼を開かれたと思われるが、これについてはのちに述べる。

二三年九月、『文壇』が創刊され、独歩も最初から参加するが、顧問格の名誉社員の中に蘇峰の名が見えるだけで、特に民友社との関係はない。翌一〇月には新文学運動の母体として青年文学会が組織される。これには独歩も最初から発起人として参加しているが、稲垣達郎氏によると、「徳富蘇峰を後楯として、幹部どころは民友社の人見一太郎を委員長格に、民友社・国民新聞・報知新聞等の青年社員、ならびに錦城学校・第一高等中学・国民英学会・東京専門学校等の学生たちであり、事務所もはじめは民友社社員宮崎八百吉（湖処子）のところに＊注2おかれていた。」とのことである。有力な会員中に『青年思海』の編集者中村修一（この時は国民新聞社員）が加わっており、人見一太郎が委員長格だとすると、青年文学会は『青年思海』の母胎である日本青年協会の発展的形態と言えなくもない。有力な会員には前記のほかに、峰夏樹（今井忠治）独歩の山口中学校時代の同級生）・紀伊縦横生（杉村楚人冠）・水谷真熊・田村三治などがある。独歩は明治二十四年一月一八日、青年文学会の席上水谷真熊の紹介で蘇峰を知った。青年文学会は毎月一回例会を開き大家から文学の講話を聞いている。この一部をまとめて『文談集』（明25・9、中村修一編）が青年文学社から出ているが、蘇峰・学海・露伴・遠湖・篁村・思軒・忍月・湖処子・縦横（のちの楚人冠）・槐南・桜痴らが名前をつらねている。とりわけ蘇峰の講演の回数が多く、手もとの資料でわかる二五年だけを見ても、「松陰について」（3月）、「マコーレー論」（4月）、「新日本の詩人」（9月）と三回続けている。二四年一月からはこの会の機関誌として『青年文学』を創刊している。しかし、独歩は東京専門学校を三月退学し、五月に帰郷しているので、この

雑誌の発刊にはあずからなかったと思われる。独歩がこの雑誌の編集にたずさわようになったのは、翌二五年五、六月ごろ再上京して以後のことである。とくに廃刊前の数字はほとんど一人で編集していることが、「欺かざるの記」からうかがわれる。執筆活動の方も、「書林に向つての二注文」（9号、明25・7）にはじまり、「青年文学者の怠慢放逸」（17号、明26・3）にいたるまで毎号のように鉄斧生または無署名で執筆している。そして内容的にも見るべきものがある。独歩文学の芽がほとんどこれらの文に出ているからである。

周知のように独歩には二つの日記がある。一つは「明治二十四年日記」（明24・1・1—7・31）で、他は明治における文学者の日記の白眉とされている「欺かざるの記」（明26・2・3—30・5・18）である。この二つの日記は著しく性格を異にしている。前者は事実の列記に終わり内面性に乏しく、独歩の伝記的事実を知る以外にあまり価値がない。それに反し後者は最初から内省に富み、独歩文学の基本的テーマが各所に現われ、明治の青年の煩悶と思想の発展の歴史として興味深い。わずか一年半の間に独歩は飛躍的に成長している。すなわちこの二つの日記にはさまれた時期が独歩の主体形成期であつたことがわかる。そしてこの時期は独歩が『青年文学』の文学運動の渦中にあつた時期である。

『青年文学』は一言で評すれば、民友社系の青年文学者の浪漫主義運動の舞台である。透谷らの『文学界』ほどには同人の堅い結束もなく、質的にも独歩や湖処子などを除いて見るべきものに乏しいが、时期的には『文学界』に先行して浪漫主義の文学運動を展開している。独歩は其中で自己の文学的主体を形成しているのである。しかも留意しなくてはならないことは、浪漫主義が決して民友社の思想・文学と相反するものではないことだ。笹淵友一氏が名著『浪漫主義文学の誕生』で分析しているように、蘇峰や湖処子の文学観は浪漫主義の潮流の中に位置づけられることだ。というよりは、蘇峰の民友社（『国民之友』『国民新聞』など、植村正久の『日本評論』、巖本善治の『女学雑誌』は明治二十年代において一つの共和国のようなもので、キリスト教とか貧民への同情とか、浪漫主義的ないしは理想主義的文学観とか、外国文学の中でもカーライル・ワーズ

ワス・ユーゴーなどを文学上の理想として紹介するなど、かなり共通点がある。そして『青年文学』も『文学界』もこの共和国の中から生まれ出た兄弟のようなものである。

独歩が『青年文学』に発表した諸文の中で、もっとも注目値するものは「民友記者徳富猪一郎氏」「田家文学とは何ぞ」「二十三階堂主人に与ふ」の三つであるが、これらがいずれも蘇峰、湖処子、松原岩五郎という民友社員の人々の批評であることは、当時の独歩の精神的位相を示すものとして興味深い。すなわち、独歩はこれらの人々の文学や思想と対決して、または影響をうけて自己の文学的主体を確立しつつあったのである。それにこの時期の独歩の読書の中心である、吉田松陰・カール・ワーズワス・エマーソン・王陽明にしても、蘇峰や湖処子のそれとほとんど共通している。

独歩が民友社の刊行物に定期的に執筆を開始するのは、明治二五年十一月の『家庭雜誌』3号からで、実際に民友社員となるのは明治二七年九月のことである。しかし、独歩が民友社の影響下に自己の文学的主体を形成したのは、民友社員となる前であり、民友社員となつてから、すなわち「欺かざるの記」の時代は、民友社の思想・文学から乳離れして独歩独自の精神世界を形成してゆく時期である。従つて「欺かざるの記」起筆以後の民友社との交渉は、簡単な箇条書式的記述にとどめたい。

蘇峰の紹介、竜溪の推薦で佐伯の鶴谷学館へ赴任（明26・9）。国民新聞社入社（明27・19・17）。従軍記者として千代田艦に乗船、愛弟通信を『国民新聞』に連載（明27・10・28・3）。国民新聞社に復帰（明28・3）。翌月から『国民之友』の編集に従事。民友社のポストを弟の収二に譲り北海道へ赴く（明28・9）。蘇峰と竹越三叉の尽力で佐々城信子と結婚（明28・11・11）。民友社の「少年伝記叢書」の執筆に従事（明29・1・30・2）。信子と離婚後民友社員山路愛山の好意により上渋谷村に居住（明29・9）。愛山の夫人山路たね編集の婦人矯風会機関誌『婦人新報』に執筆（明29・10・30・11）。再び国民新聞社に入社（明29・12）。退社は不明だが、『国民之友』『家庭雜誌』の廃刊となった明治三二年八月ごろまで寄稿は続けている。『抒情詩』（湖処子らとの共著）民友社から刊行（明30・4）。独歩の最初の短編集『武蔵野』民友社から刊行（明34・3）。

参考までに明治二十一年から三十一年までの独歩の定期刊行物での執筆活動を分析すると左のようになる。（連載はそれぞれを一回と数え、詩は幾つ一度に発表しても一と数えた。）

その他	家庭雑誌	国民新聞	国民之友	刊行物名
				明治
5				21—23
1		2		24
5	2	1		25
7	8			26
	4	17		27
4	7	23		28
2		1	3	29
10	2		18	30
3	5		10	31
	28	44	31	合
37	103			計

この表によると民友社系新聞雑誌への寄稿一〇三回に対し、その他は三七回である。しかもこの三七の中には民友社員が直接関係している準民友社系の『青年文学』『婦人新報』への寄稿二二回も含まれているので、これを省くと純粹に非民友社系定期刊行物への寄稿はわずかに一五回のみである。

以上で、独歩の文学主体形成期である明治二十年代が、ほとんど完全に民友社の圈内にあることが分かって戴けると思う。

独歩と蘇峰

前節では独歩と民友社との関係を略述した。ここでは焦点をさらにしほって、独歩と民友社の主宰者である蘇峰との関係を考察してみよう。

独歩は晩年に蘇峰を評して、「徳富蘇峰は余の恩人なるのみならず、又余の深く崇拜せる人なり。その文章の如きは日常愛誦して殆んど暗記するに至れり。（中略）余に真実の文、東坡の謂ゆる実録を書かしたるは蘇峰なり。」（『人物観』）と言ってい